

第 1 回豊岡市調査報告書



コウノトリの郷公園コウノトリ本舗前広場にて(2015 年 12 月 21 日)

日本生命財団・学際的総合研究助成
「環境イノベーションの社会的受容性と持続可能な都市の形成」
都市環境イノベーション研究会
研究代表者・松岡 俊二(早稲田大学)

2016 年 1 月 28 日

1. 調査目的

持続可能な社会形成に向けた都市環境イノベーションのあり方の検討に向けて、社会的受容性の4要素（技術、制度、経済、地域）の観点から「豊岡モデル」を明らかにするため、豊岡市のコウノトリ野生復帰事業に関する歴史的な推移と現状について調査する。

2. 訪問先

豊岡市立コウノトリ文化館

所在地：〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺 127 番地 Tel：0796-23-7750

兵庫県立コウノトリの郷公園

所在地：〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺字二ヶ谷 128 番地 Tel：0796-23-5666

豊岡市役所

所在地：〒668-8666 兵庫県豊岡市中央町 2 番 4 号 Tel：0796-23-1111

コウノトリ本舗

所在地：〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺 14-2 Tel：0796-37-8222

3. 調査日程

2015 年 12 月 20 日（日）

7:50	東京発（のぞみ 13 号 博多行き）
10:08	京都着
10:25	京都発（はしだて 3 号 天橋立行き）
11:44	福知山着
11:46	福知山発（こうのとり 5 号 城崎温泉行き）
12:40	豊岡着⇒トヨタレンタカー豊岡駅前店
13:30	施設視察①（豊岡市立コウノトリ文化館）
14:00	インタビュー調査①（NPO コウノトリ市民研究所）
15:45	インタビュー調査②（兵庫県立コウノトリの郷公園）
16:30	施設視察②（兵庫県立コウノトリの郷公園）
17:30	ホテルチェックイン@豊岡パークホテル
18:00	夕飯

2015 年 12 月 21 日（月）

8:30	ホテルチェックアウト@豊岡パークホテル
9:00	インタビュー調査②（豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課環境農業推進係）
11:00	インタビュー調査③（豊岡市役所コウノトリ共生部コウノトリ共生課コウノトリ共生係）

12:20	昼食
13:30	インタビュー調査④（コウノトリの郷営農組合）@コウノトリ本舗
16:00	レンタカー返却
16:22	豊岡発（きのさき 20 号 京都行き）
18:49	京都着
19:05	京都発（のぞみ 252 号 東京行き）
21:23	東京着

4. 調査団

調査団の構成を表 4.1 に示した。

表 4.1 調査団メンバー

	参加者氏名	所属
1	松岡 俊二	早稲田大学・日本生命財団プロジェクト・研究代表 国際学術院・アジア太平洋研究科・教授
2	松本 礼史	日本大学 生物資源科学部・教授
3	島田 剛	静岡県立大学 国際関係学部・准教授
4	岩田 優子	早稲田大学 アジア太平洋研究科・博士後期課程（研究会事務局）

5. 調査の概要

5.1 NPO コウノトリ市民研究所

会場：豊岡市立コウノトリ文化館学習室

NPO コウノトリ市民研究所代表理事・豊岡市立コウノトリ文化館長 上田尚志氏

質問項目

- ① コウノトリ市民研究所の経緯について
- ② 活動における関係機関との協働体制について
- ③ その他

質問項目への回答

- ① コウノトリ市民研究所の経緯について
 - ・コウノトリ市民研究所発足当時（1998 年）のメンバーについて教えてください。どの

ような経緯で発足したのでしょうか。

⇒コウノトリ市民研究所の発足に至る経過は、1990 年に『但馬の自然』を出版したときに遡る。自分（上田）も参加して、但馬地域で生物を教えている学校の先生が中心となって作成した。現在でも豊岡ではコウノトリだが、旧竹野町、旧温泉町などでも、それぞれの地域の自然生態について研究していた。その後、里山に道ができたり、湿地がなくなったりして、自然破壊への危機感を感じ、単に研究しているだけではなく、地域へ活動の成果を還元していこうとの思いから、1993 年に但馬の自然研究グループが中心となって、「但馬の自然を語る集い」という市民参加の研究会を立ち上げた。これを 2002 年まで続けてきた。

開発反対運動の中での自然保護ではなく、地域づくりの中で自然保護を行っていきたいと考えていた時、ちょうど、コウノトリ野生復帰事業が開始された。市民研究所の歴史とコウノトリ野生復帰事業の歴史はほぼかさなっている。1992 年に兵庫県教育委員会が設置主体となって「コウノトリ将来構想調査委員会」が設置された（豊岡市も関わっていた）。同じ頃、豊岡市教育委員会が「自然まるごと講座」を始め、自分が講師として参加し、豊岡市と自分たちの市民グループがつながることになった。自分たちは、最初は自然保護全般に関心があった。色々な生物が但馬地域で絶滅しているのに、なぜコウノトリだけ保護するのかという意識もあった。野生復帰という名目で無理をしてコウノトリの命を永らえさせることにも違和感があった。しかし、豊岡市長や豊岡市職員の熱意にほだされて、野生コウノトリの絶滅によって失った自然の価値を見直そうという価値観を共有し、コウノトリを象徴とした自然生態系全般を考えていこうというスタンスに変わってきた。そこから豊岡高校生物部などと連携して、市民参加の生物調査を展開していった。

そして 1998 年に豊岡市に在住する自然研究グループや自然に関心がある市民、高校生が中心となってコウノトリ市民研究所が発足した。

- ・豊岡市立コウノトリ文化館が 2000 年に建設され、文化館がコウノトリ市民研究所の活動拠点となった経緯について説明ください。

⇒1995 年頃、豊岡市が主導したコウノトリ文化館の構想委員会に市民研究所も委員として入り、コウノトリ野生復帰が目指すものなどの基本的な認識を共有していった。この段階で、文化館を市民活動の拠点にすることも構想に入っていた。建物の設計についてもメンバーの意見が反映された。

当時の市民研究所メンバーは約 20 人で、小学生から一般市民までいた（現在は 27 人の正会員、約 40 人の一般会員）。市民研究所を文化館付属のボランティア組織にする案もあったが、独立した市民組織（博物館の友の会のような組織）にして、文化館に先行して設立した。

- ・2004 年に NPO 法人化した経緯について説明ください。

⇒県職員であった市民研究所の事務局長が、NPO 法人化した方が将来的に良いと助言した。理由は、①行政と連携しやすい、②補助金をもらいやすい（メンバーはみな仕事を持っているが、書籍を出版する際に 100 万円程度のお金が必要）、③将来、どこかの施設の指定管理者となる可能性を考えた、の 3 点である。③については、定款に、「施設を使った環境教育を推進する」との旨を記載した。実際、2015 年 4 月から文化館の指定管理者になった。常勤 4 人、非常勤 5 人（週 3 日勤務 1 人、週 2 日勤務 4 人）の計 9 人を雇用している。文化館は週 6 日開館で、毎日 5 人は勤務するように調整している。

今のメンバーは、小・中・高校の理科の教員、市職員、一般の自然が好きな人、豊岡高校生物部 OB が多い。

② 活動における関係機関との協働体制について

- ・コウノトリ文化館は、豊岡市役所のコウノトリ共生課で管理しているようですが、コウノトリ共生系の職員との連携はどのようになされていますか。

⇒公式には月 1 回の連絡会があるが、随時、様々な相談（文化館のことやそれ以外も含め）をさせてもらっている。2000 年に文化館が開館してから、2002 年に市のコウノトリ共生推進課（現コウノトリ共生課）ができるまでは、市の教育委員会文化財係の管轄だった。その後も市が直接管理してきたが、今年 4 月から指定管理者になった（昨年 1 年は、業務引き継ぎ期間）。市民研究所が最初から指名された。

- ・具体的な活動の中で、兵庫県、豊岡市、JA たじま、農家（営農組合）、住民等との関係はどのように変わってきましたか。NPO の立場として苦労した点などあれば教えてください。

⇒兵庫県とは、但馬県民局の中の環境課と連携している。高校生による調査活動は、県からの業務委託で行っている。豊岡市とは、コウノトリ共生課、都市整備課、スポーツ振興課、生涯教育課・文化財係、大交流課と連携している。都市整備課やスポーツ振興課からは、公園整備に関する相談をよく受ける。JA たじまには、コウノトリのポスターを配布してもらっている。水田などの視察も JA を通してよく受け入れている。住民に対しては、「田んぼの学校」や市民参加行事を通じてつながっている。祥雲寺地区、特に高校生とのつながりが多い。「田んぼの学校」はコウノトリの郷公園の近くで行っている。一方、出張での「田んぼの学校」も始めた。地域が主導して、各集落で生き物調査を行う。これは市との協働事業である。出張事業を始めてから、地域に深く入っていけるようになった。

NPO として、豊岡市の環境審議会、文化財審議会、歴史文化基本構想策定委員会、国土交通省の円山川自然再生推進委員会や同技術部会にも参加している。

- ・活動を通して地域の子どもたちや住民をはじめとする県、市、JA、農家（営農組合）などのコウノトリ野生復帰事業に対する意識は変わってきたと思いますか。そうであれば、その理由についてもお考えをお聞かせください。

⇒農家の生物への関心が高まったり、子どもが川で遊ぶことに対する親の理解が深まったりした。コウノトリも宝物だが、子どもたちも宝物と思うようになった（コウノトリが教えてくれた）。

- ・コウノトリ市民研究所の活動に参加する市民数の推移に関するデータがあれば提供ください。

⇒（１）「田んぼの学校」（月１回、毎月第３日曜日）

最近の参加人数の推移は、表 5.1 の通り。雨だと人が少ない。事前申し込み不要。NPO としての活動のため、「コウノトリ応援団」のメンバーも手伝い、大体５人で対応。これまで 15 年間行ってきており、今後も気楽に続けていきたい。

表 5.1 「田んぼの学校」参加者数

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	計
24 年	20	8	34	60	90	89	140	44	30	40	20	50	625
25 年	25	28	50	27	60	55	250	40	13	15	36	30	629
26 年	25	30	45	76	82	135	80	70	34	34	33	21	654
27 年	70	23	20	18	40	43	80	43	54	111	39	70	611

（２）「出張！田んぼの学校」（コウノトリ共生課講師派遣）

2009 年から開始。市役所に申込み必要。市役所との協働ということで、事業として信頼感を持たれる。主催者は色々あるが、子どもが主体なのは変わりなし。最初は 4 件しか申込みがなかったが、増えてきた。

2014 年実施 20 回

公民館関係

港地区公民館、出石福住地区公民館、日高八代地区公民館、但東高橋地区公民館

子ども育成会・地区関係

清冷寺、江野、長谷

農会・土地改良・農地水環境保全関係

野上、森津、宮井、下陰、赤石、駄坂、下島、日高上郷、日高名色、但東中畑山、出石、中川

（３）ラムサール湿地の調査保全活動（但馬県民局環境課委託事業・兵庫県生物学会但

馬支部共催)

高校生対象 (2014 年度 豊岡総合高校、豊岡高校、香住高校)

戸島湿地 5 回 (調査 3 回、保全 2 回)

桃島池 2 回 (調査 1 回、保全 1 回)

田結湿地 1 回 報告会

(4) その他

現在は、文化館行事として実施している。

タンポポ調査 4 月、ホタル観察会 6 月、小川で遊ぼう 8 月、キノコ観察会 10 月、野鳥観察会 1 月など

③ その他

・ NPO の立場から見て、豊岡市におけるコウノトリ野生復帰事業の意義や今後の課題は何だとお考えですか。

⇒①コウノトリを象徴に豊かな自然を取り戻す、②自然と折り合った生活を取り戻す、③計画的な土地利用や地域づくりをすすめる、といった点が今後の課題であろう。いずれについても各団体がいろいろ取り組んでいる。一般市民がコウノトリや自然保護についてあと一歩詳しくなる手伝いをするのが、文化館の役割である。③については、防災・治水と自然保護との調整の問題や農地を売りたい人をどうするのかなどがあり、豊岡市として大きな計画をたてていただきたい。円山川の治水抜きに豊岡の自然再生は話せない。台風 23 号の水害後もコウノトリ事業が継続されたのは市の力だと考えている。

・ NPO コウノトリ市民研究所の今後の活動計画についてご説明ください。

⇒①生物調査については豊岡盆地の自然のモニタリングをすすめる、RD (レッドデータ) の改訂。②地域との連携については、「出張！田んぼの学校」など出張講座を増やす、地元祥雲寺地区との連携を深める。③文化館事業については、文化館を市民が集う場にする、地域の自然に関する資料収集と整理、市民講座をさらに充実させる。

その他の質疑応答

・ 1960 年代に野生のコウノトリを捕獲・人工飼育した頃から、野生復帰まで見越していたのでしょうか。

⇒その通り。最初は、コウノトリの野生復帰は比較的簡単なことだと考えられていた。しかし実際は繁殖がうまくいかず、順調にコウノトリが増え始めたのは、ロシアから 6 羽の幼鳥が贈られて、ヒナが誕生した後の 1990 年代以降のことである。2000 年代に入って 100 羽の目標が見えてきた。

・ コウノトリ野生復帰に関わる NPO としては、市民研究所が一番古いのでしょうか。

⇒市民グループ「コウノトリ応援団」が一番古い。1995 年に国際会議を契機として、自然にあまり詳しくない文系や社会系の人を集めてつくられた。交流目的の団体だったので、5〜6 年活動して、解散した。応援団から市民研究所に入ったメンバーもいる。

・ コウノトリの郷公園の建設は兵庫県が主導したのでしょうか。

⇒県の委託で、引き渡し直前まで豊岡市が主導した。当時の兵庫県の坂本知事が積極的だった。

・ コウノトリに対する市民の意識は、初期の頃、どのようなだったのでしょうか。

⇒新聞報道などで、コウノトリ捕獲の話があるのは知っていた。松島氏が一人で苦労しているのも知っていた。今では、野生復帰賛成派は 6 割、反対派は 1〜2 割。反対派は農家というわけではなく、一般市民で、コウノトリにばかりお金を使うことに対する不満がある。

・ 市民研究所と NPO コウノトリ湿地ネットはどのような関係にあるのでしょうか。

⇒湿地ネット代表の佐竹氏は豊岡市役所を早期退職して NPO を立ち上げた。湿地ネットは、コウノトリのための環境づくりにこだわっており、自然保護全般を対象とした市民研究所とはうまくバランスをとっている。

・ コウノトリ文化館のミッションは何でしょうか。

⇒①資料収集、②市民に対する自然共生に関する普及啓発。最初は年間入場者 5 万人を想定していたが、この 10 年で 40 万人の年もあった。最近は 30 万人ぐらいで推移している。観光客の受入れという側面がかなり強くなってきている。文化館としては、観光客の受入れも大事だが、市民への普及啓発の場として活用してほしいと考えている。

最初は、文化館の隣に兵庫県が博物館をつくる予定だったが、2004 年ぐらいにつくれなことがわかったので、文化館が博物館的な役割も果たしている。コウノトリ関係の展示については、元々は県の博物館に置く予定だったので、文化館にはコウノトリについてのまとまった展示がない。市民研究所に昔からいる自然好きのメンバーの好奇心を満たす調査活動も行っていきたい。

シアターでの VTR は 16 分で流しっぱなし。2005 年の放鳥までを扱っている。放鳥後については、公開用ケージの前で、10 分勝負の解説を行っている。

・ 観光客数が増えることで、市の経済が潤っているという印象はあるのでしょうか。

⇒あると思う。

- ・コウノトリ野生復帰以外の自然再生事業の進捗具合はいかがでしょう。

⇒湿地や里山整備は進み、改善されてきている。

- ・コウノトリの数は 100 羽を超えたが、このままの数で推移させるつもりなのでしょうか。まだ増やしていく予定なのでしょうか。

⇒コウノトリに任せる。研究者は豊岡市はもう生態容量的に十分だから、全国に広げているとしている。すでに青森から九州まで、30～40 羽が豊岡から飛んで行っている。3～4 歳の若い個体が多い。多くは豊岡に帰ってきていたが、最近、徳島県で巣作りを始めたペアがいる。そのうちに豊岡へ帰ってこないペアも出てくると思う。

- ・コウノトリが全国に散らばっていくことに対して、「豊岡のコウノトリ」が薄まっていくことに対する危機感はないでしょうか。コウノトリが外に出て行って困る人はいないのでしょうか。

⇒そのようなことはない。コウノトリ育む米も但馬全域に広がっている。

- ・豊岡市の中貝市長の就任がひとつの大きな転換点だったように理解していますが、その前の市長のときは、どのような感じだったのでしょうか。

⇒中貝市長の前は、明確には自然との共生思想は持っていなかったように思う。中貝市長が 2001 年に県会職員として県議会でコウノトリとの共生について働きかけ、その後、豊岡市長に就任した。市長が交代したら政策の重点の置き方が変わる可能性はあるかもしれない。



上田代表へのインタビュー①



上田代表へのインタビュー②

収集資料(各 1 部)

- ・ 但馬の自然を考える連絡会（2003）『第 10 回 但馬の自然を語る集い記録集：但馬の自然—過去・現在・未来—』
- ・ NPO 法人コウノトリ市民研究所（2015）「コウノトリの放鳥から 10 年：未来へ」ポスター
- ・ NPO 法人コウノトリ市民研究所（2012）『豊岡盆地と円山川下流域の RD [レッドデータ] 生物』
- ・ NPO 法人コウノトリ市民研究所（2011）『豊岡盆地の生きものの地図 2011』
- ・ NPO 法人コウノトリ市民研究所（2010）『田んぼの学校フィールドノート』

5.2 兵庫県立コウノトリの郷公園

会場：兵庫県立コウノトリの郷公園管理・研究棟 2 階セミナー室

兵庫県立コウノトリの郷公園総務課 倉田悟課長

兵庫県立コウノトリの郷公園総務課 西井喜久指導主事

VTR 視聴

放鳥後 10 周年を記念してコウノトリの郷公園が制作した VTR「野生復帰 10 年の歩み」を視聴した。2013 年 12 月に設立された「ニホンコウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル（専門会議）」（略称：IPPM-OWS）」についても言及があった。

質疑応答

- ・現在のコウノトリ野生復帰事業の課題は何でしょうか。

⇒野外で近親交配となるペアが出てきている。また、ペアが豊岡盆地にとどまり、なかなか外に出て行って繁殖しない。量から質への転換が大事になってきている。

- ・当初にロシアから贈られたコウノトリだけで繁殖させると、遺伝的に問題はないのでしょうか。

⇒必ずしもロシアから来たものだけではなく、多摩動物公園などから譲り受けたものともペアリングし、繁殖させている。遺伝的な多様性を確保すべく取り組んでいる。

- ・コウノトリの郷公園で飼育できるコウノトリの容量はどれぐらいなのでしょう。

⇒コウノトリの郷公園で飼育できるキャパは 100 羽である。なお、コウノトリは現在、コウノトリの郷公園以外に全国 16 ヲ所の動物園と 2 つの自治体(福井県、千葉県野田市)で約 100 羽飼育されている。

コウノトリはたくさん食べる（4～5kg の体重で、1 日 400～500g 食べる）。ヒナはもっと食べる。1 羽あたりの餌代は年間 30 万円弱で寿命も飼育下で 30 歳～40 歳と長い。そのため、コウノトリを飼うにはお金がかかる。埼玉県鴻巣市や栃木県小山市など、コウノトリの取り組みに関心があるという話は聞いているが、金銭的にも簡単なことではない。

コウノトリの郷公園全体予算は、約 9,000 万円／年（人件費除く）。職員は 30 人。うち文化庁から餌代など関係経費の 5 割の補助金をもらっている。また、トキは環境省の直轄であるが、コウノトリは文化庁の管轄で県に対する補助がある。

- ・コウノトリ野生復帰事業については、県、市、国（中央省庁）がうまく連携していると言えるでしょうか。

⇒役割分担をもってうまく連携しなければならない。コウノトリそのものに関しては県（コウノトリの郷公園）が行っており、コウノトリが生息できる環境整備の取組については豊岡市を中心に行っているなど、うまく役割分担が出来ていると思う。なお、コウノトリの野生復帰を進めるための野生復帰推進連絡協議会が組織されており、それは県民局中心で、県、市、JA、農林水産業関係者などが入っている。

- ・豊岡市のコウノトリの事業は、兵庫県が行っていることが、文化庁としては安心材料になっているのでしょうか。

⇒コウノトリの郷公園は豊岡市の施設とよく誤解されるのだが、コウノトリの飼育事業開始当初（絶滅前に最初に捕獲して飼育開始）からコウノトリの保護増殖は県の事業として行っている。当初は豊岡市に事業委託していたが、県立コウノトリの郷公園が出来てからは兵庫県の直営事業として行っている。なお、コウノトリの郷公園内にある「コウノトリ文化館」は豊岡市の施設である。ちなみに、自分（倉田総務課長）は県の教育委員会の職員で、西井指導主事は元々小学校教員で環境教育に関心があった。

- ・徳島県鳴門市のコウノトリはヒナを産んだのでしょうか。

⇒2015年5月にオスとメスで、巣を作ったが、ペアとなって卵（ヒナ）を産むまでには至っていない。メスが若く、繁殖年齢に達していなかった。レンコン田を餌場に長期滞在している。

コウノトリは、一旦ペアになるとそのまま定住することが多い。また、豊岡の環境はコウノトリにとっては住みやすいようである。なお、コウノトリの繁殖で一番難しいのはペアリングで、オスとメスが近くにいても相性が合わないとなかなかペアにならない。

- ・コウノトリの郷公園でのコウノトリの馴化トレーニングはどのようなことを行っているのでしょうか。

⇒トレーニングというより、川に見立てた水路から餌をとって来られるか、問題なく飛べるかなどを確認する。



インタビュー風景



コウノトリの郷公園管理・研究棟



セミナー室に置かれたコウノトリの標本



西井指導主事が作成したコウノトリ系譜

収集資料

- ・「兵庫県立コウノトリの郷公園」パンフレット
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園（2015）『キコニアレター』No.5
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園（2015）『キコニアレター』No.6
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園（2011）『コウノトリ野生復帰グランドデザイン』
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園（2009）「コウノトリ野生復帰推進計画の基本方針」,『コウノトリ保護増殖（野生化）事業の概要 III』（1部）
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園（2008）「コウノトリの郷公園（仮称）基本構想」,『コウノトリ保護増殖（野生化）事業の概要 II』（1部）
- ・兵庫県立コウノトリの郷公園「コウノトリ モビール」
- ・コウノトリ野生復帰推進連絡協議会（2013）『コウノトリと共生する地域づくりを目指してーコウノトリ野生復帰推進計画（2期）ー』
- ・「公立大学法人 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科」パンフレット

5.3 豊岡市役所

会場：豊岡市役所本庁舎 2 階 302 会議室

豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課環境農業推進係 沖中正孝主任

豊岡市役所コウノトリ共生部コウノトリ共生課コウノトリ共生係 藤田祐主任

質問項目

- ① コウノトリ野生復帰事業に伴う農林水産課の役割の変化について
- ② コウノトリ野生復帰事業における他の関係機関との協働体制について
- ③ 県立コウノトリの郷公園開園（1999 年）から「コウノトリ野生復帰計画」策定（2003 年）、「豊岡市環境経済戦略」策定（2005 年）までの経緯について
- ④ コウノトリの野生復帰事業実施にあたっての NPO や地域住民との関係構築について
- ⑤ コウノトリ野生復帰事業開始以前のまちづくり政策の歴史的展開について
- ⑥ 自然共生型社会に向けた都市政策における国や兵庫県、但馬地域の他地方自治体との関係について

質問項目への回答

- ① コウノトリ野生復帰事業に伴う農林水産課の役割の変化について
 - ・コウノトリ野生復帰事業開始前後における農林水産課の役割の変化について説明ください。

⇒2005 年の放鳥までは、コウノトリ野生復帰のための農業対策についてはコウノトリ共生課で担当していた。2006 年に、農林水産課の中に環境農業推進係をつくり、農家との関わりに関する仕事は農林水産課、米の販路開拓などはコウノトリ共生課で行うようになった。2006 年から 2009 年まで、米の推進はコウノトリ共生課が担っていた（2010 年～は農林水産課が担っている）。

環境農業推進係は、係長、作る担当、売る担当（2010 年～）、増やす担当がいる。販売担当は、米を売るまでの農家の思いやコウノトリ野生復帰の取り組みなどを伝えている。実際に売る JA たじまとは二人三脚である。

2006 年に、農林水産部がコウノトリ共生部に改称されたときは、農林水産課、農業共済課、コウノトリ共生課の 3 課をコウノトリ共生部の中に入れた。

- ② コウノトリ野生復帰事業における他の関係機関との協働体制について
 - ・コウノトリ野生復帰事業における市役所内（コウノトリ共生課など）の協働体制についてご説明ください。「コウノトリと共生する環境づくり」においては、兵庫県の県民局地域振興部（現地域コミュニティ振興部）が農林振興事務所、農業改良普及センター、土地改良事務所の中堅職員とプロジェクトチームを結成し、コウノトリ育む農法を研究開発したと理解していますが、豊岡市農林水産課はこの一連の取り組みにどのように関与してきたのでしょうか。

⇒コウノトリ育む農法の農業技術の体系化については、豊岡市も話し合いの場にはいたが、兵庫県が中心でやってきた。

- ・冬期湛水・中干し延期稲作は県の補助制度となっても、取り入れる農家はなかなか増えなかったようですが、その際に転換点となったと考えられる農水省の「田園自然環境保全・再生支援事業」の導入はどのような経緯で行われたのでしょうか。事業の実施にあたって、「農と自然の研究所」および「民間稲作研究所」の稲葉さんをアドバイザーとして迎えています、どのように依頼されたのでしょうか。

⇒国からの豊岡に対する支援も相当あった。

「民間稲作研究所」の稲葉氏は、元々は理科の先生で、JAS（有機農業）のトップランナーであった。有機農業の普及を目的に、稲葉氏が研究所を立ち上げた。研究所は JAS の認定機関。稲葉氏自身は栃木県出身で、栃木では冬期湛水はやらない（関東ローム層は土質が異なる）。

稲葉氏は豊岡で有機農法の指導を行い、コウノトリ育む農法の体系づくりに加わった。2003 年、2004 年で研究をして、2005 年にコウノトリ米の生産部会が立ち上がり、新しい農事暦を作成した。JA が育む農法と慣行農法の 2 つの農事暦をバイヤーに渡して説明してきた。

- ・コウノトリ育む米の販売先はどのように拡大してきたのでしょうか。

⇒販売先は 2004 年時点で 59 店舗、2011 年で 500 店舗を超えた。JA もそれ以上は把握していない。イトーヨーカ堂は、三井物産の子会社の東邦物産から卸している。

JA たじま管内では、減農薬 1,000 トン、無農薬 300 トン。一番の顧客は、人口が増えている沖縄県。沖縄のサンエースーパーでは取組みに共感され、米の主力製品として取扱われ、お中元のギフトになっている。

③ 県立コウノトリの郷公園開園（1999 年）から「コウノトリ野生復帰計画」策定（2003 年）、「豊岡市環境経済戦略」策定（2005 年）までの経緯について

- ・コウノトリ共生課は、元々、2002 年に企画部内に「コウノトリ共生推進課」として設置され、2006 年にコウノトリ共生部が新設された際に、「コウノトリ共生課」としてその中に入った。この経緯についてもご説明ください。農林水産課と共にコウノトリ共生部の中に入ったことで何か役割の変化はあったのでしょうか。農林水産課との役割分担はどのように考えられていたのでしょうか。

⇒2002 年、中貝市長の肝いりでコウノトリ共生推進課が設置された。2006 年に「農林水産部」が「コウノトリ共生部」に改称され、農業を見直すことからはじめた。その際、

関連する業務があったので、コウノトリ共生課と一緒にの方がやりやすいということで、共生課も共生部の中に入った。

- ・1992 年に発足した「コウノトリ将来構想調査委員会」の構成メンバーを教えてください。

⇒調査委員会は、県の教育委員会が設置主体。構成メンバーについては、県の文書を確認してほしい。現在のコウノトリ事業に関する県の担当は、地域政策室地域づくり課（豊岡市幸町）。コウノトリの郷公園とも連携し事業を進めている。

- ・2001 年に中貝市長が就任し、2002 年に策定された「豊岡市基本構想」の中で、「コウノトリと共に生きる」宣言がなされましたが、これは市役所にとっては大きな転換点と言えるのでしょうか。市長就任と宣言の前後でどのような変化があったのでしょうか。

⇒中貝市長の就任後は大きく変わった。2006 年に「豊岡市総合計画」が策定され、「コウノトリ悠然と舞うふるさと」が目指す姿として掲げられた。総合計画は 2007 年度を初年度とし目標年度を 2017 年度としていたが、次の計画策定が 1 年延期されている。コウノコウノトリ中心という基本方針は変わらないが、今までの 10 年間の取り組みをどのように統括して評価するのかについて、時間をかけて議論している。

コウノトリ共生課としては次の方針は決まっていない。この 10 年、豊岡市以外にもコウノトリ事業を PR してきたが、市内に十分な啓発ができていなかったのではと考えている。市民がコウノトリについて関心がないということがわかったので、今後は、内向きにも PR していかなければならない。農家はコウノトリを身近に感じているが、一般の方はコウノトリにあまり関心がない。

豊岡市がコウノトリのことについて市民にアンケート調査はしていない。例えば、大正大学・本田裕子専任講師の住民アンケート調査項目にも、豊岡市が聞きたいことを入れてもらい、市民の意見を知るようにしている。また、コウノトリ茶話会を区単位で、郷公園や市役所職員が PPT を使ってこの 10 年間の経緯について説明をし、住民と語る会を開催している。既に祥雲寺や野上など 5〜6 ヲ所で開催した。

茶話会には、市役所から共生課長と係員 1〜2 人が行く。参加住民は 30 人ぐらい、少なくとも 10 人ぐらい集まる。区の会合前後に行って、住民が参加しやすいようにしている。印象としては、コウノトリがメディアで取り上げられる機会も多く、また飛んでいる姿をよく見かけるなど、珍しいものではなくなっている。「コウノトリがいなくておかしい」という声を聞く。

- ④ コウノトリの野生復帰事業実施にあたっての NPO や地域住民との関係構築について
 - ・市と NPO や地域住民との役割分担をどのようにお考えでしょうか。「田んぼの学校」や「市民環境大学」（現在はない）は NPO や市民が主導して実施していますが、「ビオ

トープの生きもの調査・コウノトリ KIDS クラブ設立」や「子どもの野生復帰大作戦」は市が主導しているようです。

⇒「子どもの野生復帰大作戦」は、地域コミュニティ振興部（旧教育委員会）が行っている。ビオトープなどの「生き物調査」はコウノトリ共生課が NPO と協働で行っている。「コウノトリ KIDS クラブ」は 4～6 年生を対象に、年間を通して、生き物調査や野鳥観察など、自然と触れ合う機会を提供している。NPO と市がそれぞれ「生き物調査」を行い、同じような活動をしているが、特にすみ分けることはしていない。

・円山川下流域のラムサール条約湿地登録への動きは、どのような経緯でなされたのでしょうか。NPO や地域住民への説明などは行われたのでしょうか。戸島湿地、加陽湿地、田結湿地の 3 ヶ所で湿地整備が進められていますが、特にこれらの湿地周辺の NPO や地域住民からはどのような反応がありましたか。

⇒ラムサール条約湿地登録に際して戸島区等では事前に住民や関係者に説明が行われた。戸島区では、2004 年の台風の被害が大きく、治水整備を進める中で野生のコウノトリ（愛称：ハチゴロウ）が飛来して圃場整備などの治水事業を中断し「ハチゴロウの戸島湿地」が整備された経緯がある。また、コウノトリ以外に絶滅危惧種の植物もあったため、ラムサール条約湿地登録への動きは肯定的に受け取られた。

⑤ コウノトリ野生復帰事業開始以前のまちづくり政策の歴史的展開について

・コウノトリ野生復帰事業開始以前の豊岡市のまちづくりの特徴として、どのようなものが挙げられますか。住民自治の仕組みや自治会組織率について教えてください。農家と非農家のネットワークのようなものはあったのでしょうか。

⇒自治会は全地区にあるが、会費を払っている組織率についてはわからない。総務課も把握していないと思う。ほぼ小学校区で市立の公民館が設置されており、地域コミュニティ振興部（旧：教育委員会）の組織として市役所からも公民館主事が配置される。公民館活動は活発で、住民主体で課題を解決しており、役所のスリム化に貢献してもらっている。昨年からは、コミュニティ政策課ができ、公民館から地域コミュニティ（協議会）への移行を進めている。

個人的には、公民館主事は社会教育だけでなく、農業普及もやってほしい。三江地区では、郷公園の職員を公民館に招いたりして、コウノトリの話も聞いているようだ。公民館でどのような行事を行ってきたのか、事業一覧をもらおうと良い。

⑥ 自然共生型社会に向けた都市政策における国や兵庫県、但馬地域の他地方自治体との関係について

- ・コウノトリ野生復帰事業、また、自然共生型社会に向けた都市政策全般において、国や兵庫県、但馬地域の他の地方自治体との間でどのような協働体制を築かれていますか。今後の課題はありますか。

⇒持続可能な地域形成については、「コウノトリも住める地域づくり」というのが大きな目標となっている。コウノトリを足掛かりにして、どのように持続可能な地域づくりを展開していくのかを考えたときに、地域外を顧客に儲ける産業（農業）と地場産業（カバン産業）が中心となるのが前提である。人口減少対策を考えると、城崎温泉など観光分野も伸ばしていく必要がある。まちの魅力を外に PR していく。人口減少対策として、外に出ていく人を引き留めるには、産業力を強めることが大事。コウノトリが呼び水となって、コウノトリが呼び水となって、カネカソーラーテック社が豊岡に基盤を置いてくれたりしている。

人口は、毎年約千人ずつ減っている。大きく減っているのは、旧但東町など中山間地域である。仕事がないので、働く業種の選択肢を増やすことが大事。新規就農者もいるが、水稻農家は難しい。水田もなく、高い機械の設備投資も必要。2013 年度から「豊岡農業スクール」を開校して、スクール生には 1 年間毎月 10 万円の研修給付金、受入れ農家には毎月 2.5 万円の研修給付金を市から支給している。

その他の質疑応答

- ・「国際かいぎ」は第 5 回で終了したのでしょうか。

⇒2014 年の第 5 回で一区切りしたと考えている。市内（市民）に向けてあらためて啓発を図る必要があると考えている。

- ・コウノトリ共生課の職員は何人ぐらいいるのでしょうか。

⇒臨時職員を合わせて 9 人。一課一係であり。課長一係長一主任（5 人。藤田氏含む）一主事（1 人）一臨時職員（1 人）となっている。藤田主任は 2003 年入庁。商工観光課⇒国体推進課・・・⇒秘書広報課⇒コウノトリ共生課、と異動。現在 6 課目。沖中主任は税務課から農林水産課に異動してきた。

市役所全体では、臨時職員含め約 1,000 人。合併後、行革で職員数は徐々に減っている。

- ・合併後、旧豊岡市以外の 5 町の住民は、コウノトリは旧豊岡市のものという意識はあったのでしょうか。

⇒時間はかかったが、育む農法も朝来、養父、新温泉町まで広がり、農家の意識は大きく変わった。JA たじまは但馬地域全体を管轄しているが、JA との関係というだけでなく、旧豊岡市だけで利益を独占するのではなく、コウノトリのために広範囲で自然環境が整

えられていくのは良いことと考えている。

「コウノトリ育む」については、豊岡市が商標を持っており、認証を行っている。毎年農家が生産履歴を提出、申請してくるので、JA のコウノトリ育むお米生産部会の事務局が確認をして、許可を出す。無償だが、生産者を守るための商標という位置づけ。認証を受けているのは、豊岡市で約 260 人、但馬全域で約 290 人。

JA が「たじま」なのは、育む米の普及を考えると大きな意味がある。県も推進しているが、最初に動き始めたのは豊岡市なので、これからも主導していきたい気持ちがある。

コウノトリ育む農法の要件を作成したのは、県の普及センター。

「コウノトリ舞」も市の認証制度で、減農薬農法で作った野菜、果物も含む。作付け前に市役所がチェックする。県のブランド認証を受けたものだけが、市の認証を受ける資格がある。+α の努力で市の認証も受けられる。

・アイガモ農法についてはいかがでしょうか。

⇒アイガモ農法も農薬を使う農法はダメだという考えから導入された。しかし、アイガモ農法の田んぼにはアイガモしかおらず、アイガモがカエルも食べてしまうので、たくさんの生き物を同時に育むコウノトリ育む農法の方が大事になってくる。また、アイガモを飼うのはお金がかかる。

・現在は、ほとんどの農家がコウノトリ育む農法を選んでいるのでしょうか。

⇒水田が約 2,800ha のうち、平成 27 年度は 330ha（1 割強）が育む農法である。これだと少ないと思うかもしれないが、農家の 80%はサラリーマンもしている兼業農家である。兼業農家は、先祖代々の農地を保全することが大事で、農業をビジネスとして取り組んでいないので、手のかかる育む農法はやらない。元々水持ちの悪い（出来の悪い）農地もあるので、330ha というのはかなり割合が高いと言える。

・豊岡型環境創造型農業による水稻作付面積を 10 年後に 51%にするという目標値については、どのようにお考えでしょうか。

⇒51%というのは、特別栽培（特裁）レベルを想定している。特裁は国の基準で、農薬を半分以下の使用にするという基準を満たしたものに与えられる。育む農法だけでなく、農薬をあまり使わない農家を増やすという目標である。減農薬にして、農薬を使う必要のないことがわかるのが大事である。なお、県は、農薬（虫、菌、草に対する）について 20 成分まで可能としている。これを 10 成分まで減らすと特裁として認められる。

・JA は、農薬を売り込まなくても良いという考えで動いているのでしょうか。

⇒その通り。JA の目的は組合員を守ること。約 300 戸の専業農家が減ってしまうのを防ぐため、目先の利益だけを考えないように理解してもらった。

・若い世代の農家はどれぐらい育ってきているのでしょうか。

⇒専業農家で後継ぎがいない農家はない。若者の方が、環境に良いことや育む農法に興味がある。後継者は順調に育っていると言える。一軒一軒の農家では問題ないが、中山間地で農業をビジネスとしてパッケージ化していくことは考えていく必要がある。

・農業の新しい経営の形が見えてくると面白いのではないのでしょうか。

⇒野菜のビニールハウスへの補助金は、市が独自でやろうとしている。売り先がないとだめなので、詰めていきたい。何人かモデルになる農家が出てくれば面白い。無農薬農家のうち、冬にしいたけ、葉物を栽培している農家は多い。

・米栽培と組み合わせに良い作物はあるのでしょうか。

⇒人参など市場の需要がある物が良い。現実的に野菜だけでやっていくのは難しいので、バイヤーの声を聞くことでつなげていきたい。

・コウノトリが害鳥という意識はあるのでしょうか。

⇒県立コウノトリの郷公園が以前調査をしたところ、コウノトリが稲を踏む確率は1〜2%だった。しかもそのうち 80%の稲が立ち上がるので、影響はない。もう調査はしていない。

・育む農法を点ではなく、面で進める意味は何でしょうか。

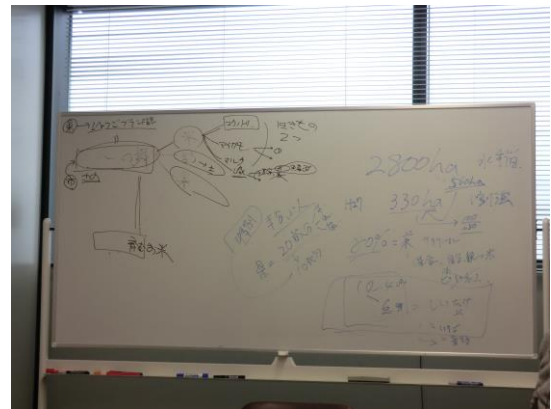
⇒育む農法をすることで市役所からの補助金がもらえる。水をはるタイミングも村単位で固めてもらった方がやりやすい。2013 年から 2015 年までの 3 年間、「集落まるごと事業」を実施し、集落単位での育む農法を推進したところ、約 40ha 増えた。

事業に積極的な村と消極的な村がある。積極的な村は、①育む農法をやってみたい中心人物がいる、または、②既に育む農法を実践している人がいる（普及するだけなので、やりやすい）。近隣農家との関係もある。専業農家の方が積極的である。積極的な村でも、村内での調整の結果、断念したところもある。個人だけでなく、地域単位で、市役所や普及員（県職員）が村に入っていって、説明する機会を与えられると良い。説明する場合は、国の制度はたくさんあるが、制度を活用すること、選択肢が増えることを教えてあげたい。アイガモ農法が悪いというわけではなく、選択肢が多い方が農家にとっても

良い。選ぶのは地域住民、農家であって、トップダウンの押し付けではない。



農林水産課へのインタビュー



コウノトリ育む農法の説明

収集資料

- ・豊岡市（2015）『コウノトリと共に生きる―豊岡の挑戦―』
- ・豊岡市（2014）『コウノトリ野生復帰のあしあと』
- ・豊岡市「コウノトリ育む農法の推進、コウノトリと共生する水田自然再生事業、『コウノトリの舞』ブランド化事業」に関する説明資料（9pp.）
- ・豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課「コウノトリ育むお米」パンフレット
- ・豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課「コウノトリ育む農法」パンフレット
- ・コウノトリ育むお米生産部会、たじま農業協同組合、豊岡農業改良普及センター、新温泉農業改良普及センター、朝来農業改良普及センター、豊岡市「平成 28 年度コウノトリ育むお米（コシヒカリ）栽培こよみ（減農薬タイプ・無農薬タイプ）」（部外秘）
- ・JA たじま、但馬地区水稻品質向上対策本部、全農兵庫県本部、豊岡浜坂・和田山八鹿農業改良普及センター「平成 18 年但馬コシヒカリ栽培こよみ」
- ・JA たじま「平成 27 年コウノトリ育むお米栽培履歴（無農薬タイプ）」
- ・全国農業協同組合中央会（2013）『『コウノトリ育むお米』が結ぶ消費者との交流』、『月刊 JA 』, 59(8), pp.36-39.

5.4 コウノトリの郷営農組合

会場：コウノトリ本舗

コウノトリの郷営農組合 稲葉哲郎組合長

概要説明

- ・豊岡市役所の農林水産課で最も付き合いがあるのが沖中氏。
- ・祥雲寺地区 23 戸のうち、農家は 19 戸。2007 年に共同作業場と共同機械を購入した。
- ・営農組合は以前は任意団体だったが、法人化した。
- ・2005 年に正式に「コウノトリ育む農法」が体系化され、2006 年にコウノトリ育むお米生産部会が設立された。生産部会は、生産者を中心に JA が事務局を担当し、各市町農政担当者、農業改良普及センターで構成されている。部会は但馬全域で、個人も団体組合も入れて、290。支部は豊岡の北部と南部、養父、朝来、温泉町の 5 支部。最初に豊岡支部ができて、徐々に増えていった。自分（稲葉組合長）は部会長でもあり、豊岡北部支部長でもある。
- ・1992 年に、地区の 165ha を買い取ってコウノトリの郷公園を祥雲寺地区に作りたいという話が行政からあった。突然のことで、どうしようという戸惑いの気持ちがあった。最初は市内に 7 つ候補地があったが、増殖センターが田鶴野地区にあったので、そこからあまり離れておらず、かつ、100 羽を超えたら野生復帰という考えがあったので、共生ということを考えると、市街地からも近い場所という地理的条件を考慮して、祥雲寺地区に決まった。
- ・当時は農薬づけの農業で、ヘリコプターから農薬を散布していた。ちょうど地域の人々が農業のやり方を変えなければいけないという気持ちを抱いていたところだったので、コウノトリが良いきっかけになった。子孫のことも考えたときに環境創造型農業を受け入れなければいけないと思った。それができないなら拒否するしかないと思った。
- ・コウノトリの郷公園の建設の話を聞いたとき、建設の目的は「人とコウノトリの共生」と説明を受けた。ただ、農業のやり方については行政が強制したわけではない。
- ・2 年間、祥雲寺地区で議論を続け、1994 年の年末に建設を受け入れることを決意した。行政から期限を決められていたわけではない。
- ・1995 年 1 月に阪神淡路大震災が起こり、郷公園の構想も頓挫する可能性があった。しかし、当時の兵庫県の貝原知事が、世界でも例のない試みとして、県としてコウノトリ事業を続けていく必要性を説いた。
- ・1996 年に「祥雲寺を考える会」を発足させ、月 1 回意見交換を行った。翌 1997 年に「コウノトリのすむ郷づくり研究会」と改名した。4 年間かけて、コウノトリの郷公園と一体的な地域づくりを目標にした「郷づくり報告書」を作成し、2000 年に地区に提出した。
- ・1999 年に郷公園が開園すると、県も市も JA も積極的に関わってきた。「郷づくり計画」ができていない段階では、県の農業普及センターが中心となって、環境創造型農法についてひとつの方法だけではなく、色々な実証実験を行っていた。試験田を多数設けて、水田が散らばっていたのを集めて農地の団地化を行った。

- ・その頃、各農家はそれぞれ農業機械を持っていたため、農業は利益を伴わない事業に変わってきていた。そこで、2001年に効率的な農業を目指し、営農組合設立準備委員会をつくり、1年で30回会議を重ねた。
- ・2002年春に営農組合が設立された。その後は、組合を中心に、環境創造型農業の活動を行っている。自分（稲葉組合長）は、2003年まで豊岡病院のリハビリ科で物理療法を行う兼業農家だったが、徐々に営農組合の活動が中心になっていった。
- ・県は、1994年から少しずつ、1996年からは積極的に視察に入ってきていた（西村氏の前任の松田氏。現在、朝来の農業普及センター）。2002年に豊岡農業改良普及センターに西村氏が赴任してからは、西村氏が環境創造型農業を主導してきた。まず、西村氏に、無農薬栽培をやれないか打診された。二つ返事で承諾した。
- ・2003年からは、除草剤を使う代わりに、田植え機の後ろに除草のための器具をつけた。しかし、全部は除草できず、手作業で除草した。兼業農家ではとても時間が足りない。大変な作業だったが、稲刈りが終わった後にカエルやバッタがたくさん出てきて、農薬を使わない効果を実感した。人間が手を加えれば生き物を育めることがわかった。
- ・2003年秋から、栃木県の稲葉光圀氏（民間稲作研究所）が、普及センターと組んで2年間、「豊岡にあった有機農法をどう取り戻していくか」の指導に来た。当時、コウノトリ共生課長をしていた佐竹氏が呼んだ。
- ・2003年の年末に、稲葉氏から冬期湛水をしてほしいという依頼があったため、地区の50～60haのうち、2～3haで開始した。やってみると、翌2004年春に、ひびの間から土の上に5～8cmぐらいの層（トロトロ層）ができており、イトミミズやユスリカが大量発生していた。人間の排泄物でもそれだけの堆積のトロトロ層をつくるのは難しい。自然界のすごさを感じた。
- ・2004年からは、米ぬかペレット（米ぬか+おから）も導入した。米ぬかをえさにしてイトミミズが田んぼに住みついて動くため、田んぼが濁る。その結果、田んぼに草が生えなくなる。
- ・中干しについては、稲に最も被害を与える害虫であるカメムシを食べるカエルがオタマジャクシからかえるのが7月上旬のため、中干しを1ヵ月遅らせる中干延期を行っている。
- ・2004年頃から、行政の役人も多数視察に来て、県が土地改良を行い、「生き物の逃げ場⇒魚道⇒水路」という水のネットワークをつくった。こうすることにより、中干し後に田んぼが乾燥する期間も、次の冬期湛水まで、生き物がそこに住み続けられる。すなわち、一年中生き物が生息できる環境をつくりながら、稲作も続けられる。
- ・このような環境創造型農業を行うことで、苗の分けつがあまりなく、米の収穫量も落ちるのではないかと危惧していたが、1反（0.1ha）で8俵を目標としていたところ、8.2俵ぐらい収穫できた。また、1年だけでは成果はなかなかわからないが、2～3年続けて一等米が収穫できた。とはいえ、慣行農法では、1反9～10俵ぐらい収穫できる。そんなに差はないと思うかもしれないが、農民の立場では1俵（60kg）の差は大きい。
- ・当時、稲の借り入れ前からNHKなどのマスコミが取材に来ていた。

- ・8月下旬に生き物調査を行い、慣行農法、アイガモ農法、育む農法（減農薬）、育む農法（無農薬）で比較したところ、育む農法（無農薬）の水田が、圧倒的に生き物が多かった（カエル、カマキリ、クモなど）。カエルはカメムシを食べるし、カマキリやクモも害虫を食べる。朝、クモが水田一面に巣をはっていたこともある。育む農法がコウノトリとの共生を可能にし、人間の取り組みによって生き物が変わってくるのを実感した初めての瞬間だった。
- ・2005年に、「コウノトリ育む農法」という名前をつけた。
- ・「コウノトリの郷」という名称は祥雲寺地区だけではなく、少なくとも豊岡市、最終的には但馬全域に広めていきたいという思いでつけた。但馬全域で農業が変わらなければならないと考えた。

質疑応答

- ・放鳥から10年経ってみて、事業は順調だと思いますか。この10年をどのように受け止めていらっしゃいますか。

⇒初めての試みだったので順調かどうかはわからない。今は通過点だと思っている。特に農業全体としてはまだまだで、特色ある農法はなかなか合意できるものではない。

- ・克服しなければならない課題は何でしょうか。

⇒育む農法を実践してくれる農家を更に増やしていく必要がある。

- ・育む農法に取り組む専業農家の数は頭打ちに近いと市役所の方には言われていましたが、いかがでしょうか。

⇒排水溝を閉めれば自然に水がたまり、冬期湛水が可能になる。早期・冬期湛水には村ぐるみの取り組みが必要。水がなければできないので、よその村の水路を共同で使えるよう、水利全体の仕組みを変える必要がある。

育む農法では、2月末に落水して、3～4月に田んぼが乾き、畦直しをして、4月後半にまた水を入れる。無農薬栽培は田植え前が重要で、代掻きして草を浮かせ、排水溝から水を出すという作業を2回繰り返してから田植えを行う。減農薬栽培は少し違う。部会の方針として、減農薬から無農薬栽培を増やしていく最終目標に切り替えている。減農薬といっても、通常は慣行栽培の半分の農薬を使うところ、ここでは8割減らしている。除草薬を使わないことに大きな意味がある。

- ・減農薬と無農薬栽培では全く異なるということで、減農薬から無農薬栽培への転換は農家の意識を変えることだけで可能でしょうか。

⇒最初、無農薬栽培などとてもできないと言っていた農家が変わってきた。減農薬栽培より無農薬栽培の方が多く収穫できたと言っている。無農薬栽培の良さを知らしめていき、少しでも早く転換していかなければならない。

・農業の後継者問題についてはいかがでしょうか。

⇒豊岡市としても後継者を増やすことを考えている。しかし、農業の「根」がなければ、若い人は入ってこない。日本の農業の仕組みづくりはまだできていない。

最初の頃よく言われていたのが、コウノトリだけを大事にするのではなく、コウノトリが住める環境は人間も住みやすい環境であり、そのために安心安全なお米を作りましょう、ということ。キーワードは命であり、将来に向けて貴重な事業を行っていると考えている。

・郷公園の建設の話があったときに、祥雲寺地区の住民に「受け入れたくない」という意見があったので、2年間話し合いをしたのでしょうか。

⇒受け入れたくないという意見はなかったと思う。静かな村が変わってしまうのではないだろうか、という慎重な意見はあった。

・祥雲寺地区の19戸のうち何戸ぐらいが慎重だったのでしょうか。

⇒それほど多くはない。今までの農業を切り替えなければという思いはみな持っていた。

・コウノトリは害鳥という意識はあったのでしょうか。

⇒昔は手で田植えをしていたので、一株でも踏まれたら大変という意識があったのではないか。営農組合も少し参加して、コウノトリが実際に稲を踏むかの調査を行なったが、コウノトリは稲と稲の間の空間を選んで歩いていることがわかった。それで、誰も害鳥だと非難しなくなった。

・アイガモ農法については、いかがでしょうか。

⇒この地域で、アイガモ農法は育む農法の前の先輩である。しかし、アイガモは草も食べるが、生き物も食べてしまう。無農薬農法としては優れているが、コウノトリとの共生には向いていない。

柵で囲った水田があるのは、アイガモを守るためではなく、鹿や猪の侵入を防ぐため。鹿は苗を食べるし、猪は土の中の生き物を食べるので、水田をぐちゃぐちゃにしてしまう。



コウノトリ本舗でのインタビュー



コウノトリ本舗前の「^こ幸のトリング」

収集資料(1 部)

- ・コウノトリの郷営農組合「コウノトリと共にくらす郷づくり・村づくり・人づくりーコウノトリ育む農法の発展を目指してー」

5.5 豊岡市立コウノトリ文化館(施設視察)

豊岡市立コウノトリ文化館 上田尚志館長

公開飼育ケージ内のコウノトリを観察した後、シアタールームにてコウノトリの野生復帰の取り組み VTR を視聴した（16分）。VTR では、「(野生復帰の取り組みによって) 最も大きく変わらなければならなかったのは、農業です」と解説があり、コウノトリと生きるための農業の重要性に触れていた。



公開飼育ケージ内のコウノトリ



コウノトリ文化館正面

収集資料

- ・「人と自然の共生を考えるエコミュージアム:豊岡市立コウノトリ文化館」パンフレット

5.6 兵庫県立コウノトリの郷公園(施設視察)

兵庫県立コウノトリの郷公園総務課 倉田悟課長

コウノトリの郷公園の車にて、飼育ゾーン（非公開エリア）の視察を行った。



繁殖ケージ前での説明

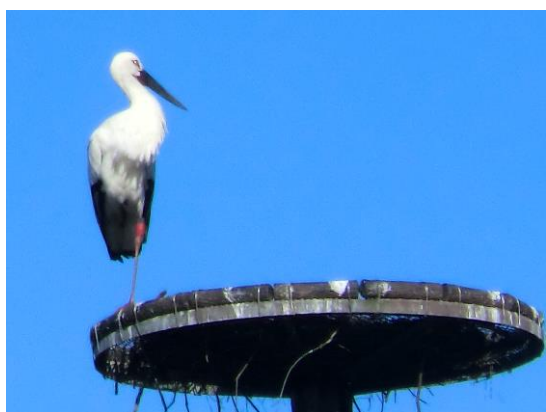


繁殖ケージの中のコウノトリ

6. おわりに

今回は第 1 回現地調査として、豊岡市のコウノトリ野生復帰事業に関する大まかな事実関係を確認するため、4 つの組織（豊岡市役所、NPO コウノトリ市民研究所、兵庫県立コウノトリの郷公園、コウノトリの郷営農組合）に対して、インタビュー調査を行うとともに、豊岡市立コウノトリ文化館と兵庫県立コウノトリの郷公園を視察した。本調査のために多くの時間を割いてくださった豊岡市役所の藤田様、沖中様、NPO コウノトリ市民研究所の上田様、兵庫県立コウノトリの郷公園の倉田様、西井様、コウノトリの郷営農組合の稲葉様に、改めて感謝します。

本調査で得た情報をもとに、引き続き、コウノトリ野生復帰事業に焦点を当てた豊岡市の都市環境イノベーションの「豊岡モデル」について、兵庫県民局や JA たじまなどへのインタビュー調査も行い、社会的受容性の観点から研究を進めていく予定です。



人工巣塔の上のコウノトリ



水田に設置された魚道